

なぎさ NEWS



「西なぎさ」での地曳網調査 - 網を曳くより大変なのは -



小さな生き物を一個体ずつ分けていく

てんじ 展示や教育活動に生かすことを目的に、水族園は1994年から地先水域の水生生物の生息調査を行っています。そのひとつが、葛西海浜公園にある「西なぎさ」での地曳網調査です。今年度は2ヶ月に1度実施しています。調査では、2ヶ所で網を曳いて生き物を採集します。採集された生き物は標本にし、持ち帰って種類分けをします。実はこの種類分け作業が網を曳くよりもずっと大変なのです。時期によりますが、魚類はおおよそ10から20種が採集され、冬の少ないときでは数匹、春から夏にかけての多いときでは数千匹にもなります。魚類以外の生物は、多いときで20種近くになります。大きささまざまで、米粒より小さい生き物もあります。種類分けができたら、次は名前を調べます。大きな魚は特徴がはっきりしているため、すぐに名前がわかることが多いのですが、稚魚の名前を調べるのは一苦労です。図鑑と見比べながら体の模様を観察したり、ヒレの棘や軟条を数えたりします。名前がわかったら、大きさや数を記録し、調査終了です。

調査結果は毎回、「東京の海」エリアの「葛西の海2」水槽でお知らせし、水槽には採集された生き物の一部を展示しています。地曳網調査でわかった「西なぎさ」の様子に注目してみてください。
(飼育展示係 村松 菜由子)

トビハゼの繁殖 - なぞの多い子どもの生態 -

トビハゼの生態は古くから研究されていますが、わかっていないことも少なくありません。なかでも実際の海でのふ化後の子どもの暮らしについては、ほとんどわかっていません。

水族園では、現在、8月に「東京湾の泥干潟」水槽で繁殖したトビハゼの子どもの展示を始めました。ふ化直後は全長3mmほどで、エサには大きさ0.3mmほどのシオミズツボムシという動物プランクトンをあたえます。しばらくは水槽の中層を漂っていますが、実際の海ではこの時期に潮流に流されながら生息場所を広げるのでしょう。ふ化後約40日(約10mm)ほどで徐々に水槽の底へと生活の場を変えていきます。驚くことに、底でくらすようになってから2～3日で目の位置が頭の横から上へと急激に移動し、トビハゼらしい顔つきになります。それから数日後、徐々に陸上への移動を開始し、水面直下にいることが多くなります。実際の海では岸近くの浅瀬にいて、上陸できるように少しずつ体を準備するのかもしれない。

ふ化後約50日(約20mm)で、ついに水槽内に準備した陸地に完全に上がり始めます。現在では30～40mmまで成長し、陸上にいる時間も増え、エビやゴカイのミンチも食べるようになっています。実際の海での様子にあれこれ思いを馳せながら飼育中です。(飼育展示係 田辺 信吾)



全長約3mmのふ化直後の子ども



全長30～40mmの上陸した子ども

なぎさ 生き物ミニ情報

水族園は「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、前号に掲載できなかった8月の結果を含めた地曳網調査の結果と11月に実施した生き物調査の結果をお伝えします。

●地曳網調査と生き物調査の結果

8月地曳網調査：水温は28℃でした。ギマやシロギスの幼魚など、夏によく見られる生き物が多く採集されました。

10月地曳網調査：水温は23℃でした。調査前日に台風18号が通過した影響、クルマサヨリやヨウジウオなど、「西なぎさ」ではあまり観察されない生き物が採集されました。

11月生き物調査：11月にしては暖かく、気温は18℃でした。コメツキガニやオサガニなどがせわしく動きまわり、エサを食べていました。沖には渡って来たスズガモやカンムリカイツブリなどが観察されました。